

万葉集の「は」構文

半藤 英明

一、論点

概論的ではあるが、古代日本人は名詞文（名詞述語文）を作ることが少なく、古代日本語には動詞文（動詞述語文）の多かったことが、大野晋（二〇〇六）の指摘にある（116頁～117頁）。このことを「は」助詞との関連で考えれば、古くは「は」構文が少なかったことも考えられる。それは、「は」の働きの一面であり、且つ、最も重要な働きである主題—解説構造の形成が、文法的に見て名詞述語文を作る典型のものと考えられるからである。

しかし、万葉集で見れば、「は」の使用は、連体助詞「の」や格助詞「に」の使用数ほどではないが、他の助詞と比べ、突出している¹。名詞述語文が少ないにもかかわらず、「は」の使用が多いとすれば、それは、名詞述語文ではない「は」構文が多用されているということである。然れば、そのような構文は、「は」の如何なる働きによって、如何なる表現を作っているのであろうか。

二、万葉集の「は」構文

万葉集の「は」構文について、森野崇（一九八四）は「接続の面から考えた場合、体言に下接するのが、『は』の中心的用法であると言えよう」（91頁）と指摘している。体言下接の「は」では、所謂「主語」（ガ格に立つもの）に下接するものが圧倒的に多い（約七四％）。文法的に見れば、「は」による主題—解説の構造は基本的にはモノ・コトといった体言的要素について説明・解説を加えるものであり、万葉集の「は」が体言下接を中心にするのではなく、述語文の種類として、まずは、その構造を顕著にする名詞述語文の存在が想起されるところであるが、冒頭の指摘のように名詞述語文の数は動詞述語文の一割にも満たない。以下に、『日本古典文学全集』（小学館）から名詞述語文の例を挙げる。（本論は、考察対象となる「は」構文を、主文・主文の扱いができるもの、に限る。）

1 世の中は（波）空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり
（七九三）

2 ちはやふる神のみ坂に幣奉り齋ふ命は(波)母父がため (四四〇二)

3 うつせみは(波)数なき身なり山川のさやけき見つ道を尋ねな (四四六八)

4 いざ子ども狂わざなせそ天地の堅めし国そ大和島根は(波) (四四八七)

5 玉梓の妹は(者)珠かもあしひきの清き山辺に撒けば散りぬる (四四一五)

6 古衣打棄つる人は(者)秋風の立ち来る時に物思ふものそ (二六二六)

例文1は「世の中は、むなしなものだ」の意、2は「慎み祈る命は、母父のためだ」の意で、ともに体言止めの形式である。3は「人の身は、はかないものだ」の意で、助動詞「なり」を伴う正格的なものである。4は倒置形であるが「日本国は、天地の神が造り堅めた国だよ」の意、5は「妻は、玉なのか」の意とされ、6は「古衣を捨て去る人は、秋風の来る頃に、物思いをするものだ」の意であり、いずれの文末も、体言直下に指示や疑問の助詞が付く形である。同様の主題―解説の構造にあるものの、体言を承けるのではなく、活用語を承けているものもある。

7 あしひきの山に白きは(者)我がやどに昨日の夕降りし雪かも (三三二四)

8 防人に行くは(波)誰が背と問ふ人を見ることがともしき物思もせず (四四二五)

例文7の述部は体言直下に疑問の助詞が付く形で「山に白いのは、雪だろうか」の意、8では「防人に行くのは、誰の夫か」の意で、述部「誰が背」は体言止めの形である。形容詞述語文の数は、名詞述語文よりも更に少ない。いずれも「は」が体言を承け(活用語を承けるものもある)、それらを主題と扱い、その解説として述語形容詞を配するものである。

9 ますらをのさつ矢たばさみ立ち向かひ射る形的形は(波)見るにさやけし (六一)

10 人もなき空しき家は(者)草枕旅にまさりて苦しかりけり (四五)

例文9は「形的形の涙は、見るからにすがすがしい」の意で、形容詞単独で終止する。「は」の上接語「形的(の涙)」は述語形容詞「さやけし」の属性主である。例文10は「人もいない、むなしの家は、旅にもまして、苦しいことだ」の意で、文末に「けり」がある。こちらは「空しき家」が感情形容詞「苦し」の認識対象である。(これら形容詞述語文については、後に節を立てて扱う。)

上記の例文は、いずれも「は」構文の典型的な構文タイプであるが、そのような「は」構文は、万葉集全体では少数

であり、他の大部分は動詞述語文である。動詞述語文では、動詞単独で終止するものは少なく、ほぼ助動詞を伴い、また、感動の助詞を付接するなどのモダリティ形式が現れる。

11 竜の馬を我は(波) 求めむあをによし奈良の都に来む人のたに (八〇八)

12 はろはろに思ほゆるかも白雲の千重に隔てる筑紫の国は(波) (八六六)

13 ぬばたまの夜渡る月を幾夜経と数みつつ妹は(波) 我待つらむぞ (四〇七二)

14 秋されば置く露霜にあへずして都の山は(波) 色付きぬらむ (三六九九)

15 天の原振り放け見れば大君の御寿は(者) 長く天足らしたり (二四七)

16 今是我は(者) 死なむよわが背恋すれば一夜一日も安げくもなし (二九三六)

例文11は「竜馬をわたしは探そう」の意、12は倒置形であるが「筑紫の国は、はるかに遠く思えることだ」の意、13は「妻はわたしを待つているだろうよ」の意、14は「都の山は色づいたであろう」、15は「大君のお命は、とこしえに長く空に満ち満ちている」、16は「もうわたしは、死にますよ」のような意である。「は」の働きが主題—解説の構造を形成するにより「判断文」(二)「判定文」(とも)を構

成することからは、文末にモダリティ形式が現れ易いことは想定範囲である。特に「む」「らむ」といった推量判断の存在は、その構文が判断文であることを顕著にするものである。が、そのような「は」構文、即ち、判断文たる動詞述語文が万葉集の数多くを占めることは、万葉集の表現性の一端を表すものとも考えられる。

三、「は」構文による描写の表現

和歌文学の傾向は、叙情、もしくは、叙景に傾斜していると考えられ、主題—解説の構造といった説明調の表現世界には有り難いことが想定される。即ち、例文1〜8のような「は」による名詞述語文の表現タイプの少なさは、自明なことでもあるように思える。加えて、例文9・10のような「は」による形容詞述語文の少なさは、モノ・コトの属性を表現したり、認識対象への感情をダイレクトに表現するような歌の少なさである。即ち、万葉集の「は」構文に動詞述語文が多いことは、概して、その表現世界が主に動的な事柄であることを示していると考えられる。尾上圭介(二〇〇六)では「文表現というものは、どのようなものであれ、すべて、存在承認か希求である」(9頁)と述べているが、その観点からすれば、「存在承認か希求か」

をほぼ動的概念で捉えている、ということである。

動的な表現世界としての「叙情」の表現では、表現形式上、特定の述語文に片寄ることが考えにくい。感情の様相を表現するのに特定の述語文が強く連関することは想定されない。一方、動的な表現世界としての「叙景」の表現、即ち、動きのある自然描写・現象描写は、動詞述語文の役割である。

動作主体による動作の表現は、典型的には、現代語で「風が吹く」「雨が降っている」「鳥が飛ぶ」「人が歩いている」のように「が」構文となるが、古代語の場合には「心地まどふ」「日たくる」のように無助詞の形式「 ϕ 」が多い。しかも、そのような表現は「現象をあらわす名詞に用例の偏りが見られる」とされる。「百人一首」(講談社学術文庫)から例を引いてみる。

○ いにしへの奈良の都の八重桜(ϕ)けふ九重にはほひぬるかな

○ 高砂の尾上の桜(ϕ)咲きにけり外山の霞立たずもあらなむ

それぞれの「八重桜」「桜」は、述語動詞「にほふ」「咲く」の動作主体であり、主格表示が無助詞の形式になっているが、現代語ならば「が」の存在が適するところである。ともに題詠歌であるのだが、これらは表現上、自然描

写・現象描写の趣きであり、「現象描写文」⁷⁾となっているところから「常にテンスに指定されている」⁸⁾ため、「ぬ」「けり」といった助動詞を伴うものとなっている。概して、文表現としての動詞述語文は助動詞を伴い易い。尾上圭介

(二〇〇六)は、「存在承認か希求か」を目指す文表現では「動詞を用いて運動の(何らかの意味での)存在を語るためには、運動の存在を話し手の立っているイマ・ココとの関係において位置づけなければならぬ。そのときに必要となるのが『た』『ている』『う(よう)』という複語尾(あるいは複語尾に相当する語連鎖)であろう」(5頁)と述べている。

万葉集にも、上記と同じようなことがある。

○ 若草の夫の思ふ鳥(ϕ)立つ (一五三)

○ 梅の花(ϕ)咲きて散りぬ (四〇〇)

○ 陸奥山に金花(ϕ)咲く (四〇九七)

しかし、万葉集には、連体句のものに次例のような「が」による描写の表現が見える。

17 あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が(之)袖振る (二一〇)

18 まそ鏡持てれど我は駿なし君が(之)歩行よりなづみ行く見れば (三三二一六)

例文17は「君が袖振る(のを)」、18は「あなたが歩いて苦勞して行く(のを見ると)」の意であり、述部「振る」「な

づみ行く」の動作主体を「が」で示している。連体句であるため、現象描写文とは分析できないが、表現上は自然描写・現象描写の趣きにある。どちらの例も、文意に於いて17には「君―野守」、18には「君―我」という対立関係が見られることから、(無助詞ではなく)明示的に「が」の表出があつたものとも考えられるが、少なくとも、万葉集に於いて描写の表現としての「が」構文が容認されるものであつたことは明らかである。

もつとも、万葉集の「が」構文(約千例)では、およそ連体用法が六〇%、主格用法が四〇%であり、主格用法は未だ主流ではない。主格用法では従属節(連体句、条件句、並列)のものが約五七%(約二百例強)を占めている。連体句、条件句の主語には「は」を使いにくいという構文上の制約があることに加え、使用例が主節・従属節ともに「吾が」「君が」「妹が」「吾妹子が」「父母が」のように、ほぼ定型化していることでは、動詞述語文に於ける主格助詞としての「が」の使用は、現代語のようなものではなかつた。つまり、表現の構成に何らの制約もない環境の下で、動詞述語文としての「が」構文を使用することは稀であつたことになる。

従つて、万葉集では、動的な自然描写・現象描写に当たるものも、次例のような「は」構文の表現となる。自然描写・

現象描写の表現性にあることでは、テンス・アスペクトに関わる助動詞が当然、多く現れる。

19 田児の浦ゆうち出でて見ればま白にそ富士の高嶺に
雪は(波)降りける (三一八)

20 愛しきかも皇子の命のあり通ひ見しし活道の道は
(波) 荒れにけり (四七九)

21 春されば卯の花腐し我が越えし妹が垣間は(者) 荒
れにけるかも (二八九九)

それぞれは、例文19「雪は降っていることだ」、20「(安積皇子ゆかりの)活道の道は荒れてしまった」、21「恋人の家の垣根は荒れてしまったことだ」の意であり、いずれも内容上は眼前描写的なのであるが、動作主体が「は」で示される。古代語に多い無助詞の形ではなく、「が」を用いることもない。無助詞の形式か「は」を用いるかの選択に韻律上の問題があることは踏まえなければならぬとしても、これらのような「は」構文の存在は、万葉集の自然描写・現象描写が眼前描写、または、眼前描写の扱いでは為されていないことを示すものである。

嘗ての議論であるが、所謂「格」の概念が主に動詞に内蔵されるものであることは既に明らかである。即ち、動詞述語文では格述構文が基本であり、通常、主語の提示は、主格助詞「が」によって為される(繰り返し返すように、古代

語では無助詞の形式が多い)。しかも、そのことは、動詞述語文が客観的な表現としての扱いにある現象描写文として表現される性質のものであることにも繋がっている。

つまり、動詞述語文で「は」を使用することは、本来的には格述構文・現象描写文として表現される性質のものを、題述構文・判断文に作り変えて表現することである。中西進(一九七五)には「(万葉集の中に)自然と人間とが濃厚にかかわりあっている歌は枚挙にいとまのないほどである」(100頁)とあるが、万葉集では、自然を取り上げる場合でも、描写としての「自然そのまま」ではなかったということである。

四、「は」による判断文の形成

万葉集の「は」の例には、前掲のもの他に、連用語(助詞・副詞)を承けるもの(用例全体の約一八%)、また、「は」が述部へと挿入された表現形式のもの(同じく約三%)が存在する。

連用語を承ける「は」は、もとより述語にかかる成分を強めるものであり、連用語自体を主題化することの必然性が乏しいことにより、ほぼ対比の用法となる。そのこともあり、条件句内にあるものが多い(例文22~24)。

22 風多く辺には(者)吹けども妹がため袖さへ濡れて
刈れる玉藻そ (七八二)

23 逢はむとは(者)千度思へどあり通ふ人目を多み恋
ひつつそ居る (三二〇四)

24 しまらくは(波)寝つつもあらむを夢のみにもとな
見えつつ我を音し泣くる (三四七二)

例文22は「風が激しく岸には吹いているのに」、23は「逢おうとは何度も思うのだが」、24は「しばらくでも寝つづけたいのに」の意である。どれも自然描写・現象描写の表現とは分析し得ない。

また、述部への「は」の挿入にも強調の意味合いがあり、対比のニュアンスが浮かび上がるため、条件句内にあるか(例文25)、他の場合は並列(例文26・27)となる。多くは複合動詞への「は」の挿入であるが、断定の助動詞に挿入されるもの(例文28)も見られ、しかも、ほぼ助動詞「ず」を伴うという形式上の特徴がある。

25 雨降らば着むと思へる笠の山人にな着せそ濡れは
(者)ひつとも (三七四)

26 潮満てば水沫に浮ぶ砂にも我は生けるか恋ひは(者)
死なずて (二七三四)

27 玉の緒のくくり寄せつつ末つひに行きは(者)別れ
ず同じ緒にあらむ (二七九〇)

28 わが祭る神には(者)あらず大夫に着きたる神そよ
く祭るべき (四〇六)

例文25は「びしよ濡れになつても」の意、26は「わたしは生きていることか、恋い死ぬこともなくて」の意、27は「行き別れず(ばらばらにならず)、同じ緒で繋がっていたい」の意、28は「わたしの祭る神ではありません」の意である。いずれ判断文か、判断文中に取り込まれたものであり、自然描写・現象描写の表現にはない。

例文11、16、また、19、21のような動詞述語文とも併せ、万葉集での「は」構文の多さは、判断文の多さである。特に、19、21の自然描写・現象描写に当たる動詞述語文での「は」の使用は、通常ならば、無助詞の形式(「格述構文の資格にあるもの」)をも「は」の構文として表現することであり、これは「見たまま」「聞いたまま」のような「自然そのまま」の事態認識の表現にも「は」を用い、いわば判断文としての自然描写・現象描写を作っていることである。

つまり、万葉集の自然描写・現象描写は、単なる客観的な表現としてではなく、話者の判断を加えた上で提示されるものになっているということであり、話者の意識下に取り込まれた自然描写・現象描写が話者の目を通して表現化され、その映像が読み手(聞き手)に提示されるものになっているということである。森野崇(一九八四)は、万葉集の

「は」が広く「前提として特に意識していた事柄に関連して、ある事柄をとりたてて示す」と指摘している(97頁)。万葉集の表現世界は、そのような「は」の使用によって、歌のモチーフやテーマを主観化した様相の中で処理していると考えられる。それは、換言すれば、万葉集の和歌が歌人の視点を強く認識させる表現にあることを示していることである。

五、形容詞述語文の表現

万葉集の表現世界が歌のモチーフ・テーマを主観化した様相の中で処理していることは、形容詞述語文のあり方も象徴的に反映されている。

前に、形容詞述語文として例文9・10を掲げたが、以下、同類を挙げる。

29 ひさかたの天路は(波)遠しなほなほに家に帰りて
業をしまさに (八〇二)

30 暁と夜鳥鳴けどこのもりの木末が上は(者)いまだ
静けし (一一二六三)

例文29は「天路は遠い」、30は「この山の梢のあたりはまだ静かだ」の意で、それぞれ「は」の上接語「天路」「木末が上」は述語形容詞「遠し」「静けし」の属性主である。このような事物を主語に立てる場合は、現象描写文として

表現される傾向を強くするが、判断文として表現することも可能であるため、「が」「は」の両方を取り得る^①。が、ここで「は」を選択していることでは判断文としての捉え方をしているということである。

31 夕闇は(者)路たづたづし月待ちていませわが背子
その間にも見む (七〇九)

32 風をだに恋ふるは(波)ともし風をだに來むとし待
たば何か嘆かむ (四八九)

33 我が恋は(波)まさかまかなし草枕多胡の入野の奥
もかなしも (三四〇三)

例文31は「宵闇は路がおほつかないですよ」と訳されている。「夕闇は路たづたづし」という文の構成は、「象は鼻が長い」の文に象徴的に代表される「くは…が形容詞」の表現形式である。「が」の部分が無助詞の形式となつて「くは…(φ)形容詞」の表現であるのは、前述のごとく主格助詞「が」の無助詞が一般的だったことの背景に因るものと思われる。この例の「たづたづし(たどたどし)」は「不確かだ」の意で、意味的には属性の表現とも評価の表現とも分析し得るが、「路(φ)たづたづし」と「が」の表示がないところからすれば、描写的な表現である可能性がある。但し、表現全体で見れば、「路がたづたづし」という現象描写としての面と、「夕闇はたづたづし」という判断

文の面を同一構文上に表現したものと判断され、トータルには「夕闇」を主題とした判断文であると見るべきである。

一方、例文32は「風をでも待ち恋うているとは羨ましい」、33は「わたしの恋は今もせつない」と訳されるもので、感情形容詞「ともし」「かなし」を述語にする表現である。感情の認識主体を話者と捉えれば、「は」の上接語「恋ふる(こと)」「我が恋」は認識主体から見た認識対象ということになる。然れば、現代語の場合、感情形容詞の認識対象は、通常「が」の表示になるのであるが、そこに「は」を使用して主題化していることでは、形容詞述語文と「は」との関係性の強さを思わせる。感情の表明が判断文として表現される性質を負うことで認識対象までもが「は」での表示となり、「は」構文となっていることも考えられる。

前例は、いずれも文末が形容詞で終止する形であり、万葉集の形容詞述語文には、このように助動詞を付さないものが多い。大野晋(一九八〇)は「形容詞による断定は、時間に関係なしに、物の性質や状態について下す判断の表現だ」(268頁)と述べており、形容詞述語がそれ自体で断定判断を示していることからすれば、つまり、万葉集の形容詞述語文は、モノ・コトの性質・状態に対する断定的な判断であったり、感情の認識対象を主題化して断定的な判断を下す表現になっている、ということである。

六、万葉集の表現性

万葉集の「は」構文は、その表現世界が話者の主観を表明する様相の判断文で作り上げられていることを示している。それは、現象描写文となる性質を負う自然描写・現象描写に対しても反映され、そのようなものに対しても話者の判断を加え、話者のものとして表示するという態度で表現される。情景の描写を淡々と、いわば、話者とは外側のものとして描写するのではなく、話者の内側のものとして表明する、そのことが万葉集の描写表現に見て取れる。

伊藤博（一九八三）は、万葉集の表現について「萬葉の人々が、より強くみずからを訴え、より深く人生を語るために、抒情詩の構成的で統合的な集合性をことのほか重んじたことが知られるであろう。『萬葉集』は抒情詩集であるいっぽうにおいて、抒情詩による物語集でもあったといえる。歌の集まりが後の世にいう散文の任務をも力強く担っていたのが『萬葉集』なのであった」（232頁）と述べている。「より強くみずからを訴え、より深く人生を語るために、抒情詩の構成的で統合的な集合性をことのほか重んじた」の指摘は、万葉集全般に「は」構文が多用される状況を反映していることと見ることができ、また「散文の任務をも力強く担っていた」の指摘は、動詞述語文が多用されつつも名詞述語

文・形容詞述語文からなる和歌群も少数ながら存在し、全体として述語文のバリエーションが豊かに見られることと結び付くものでもあるだろう。

和歌文学のみならず、随筆、物語・小説など、文学作品全般は、本質的に話者の主観を書き連ねていく営みである。従って、そこに、主題―解説の構造を典型とする「は」構文が多用されることは、文学作品の宿命とでも言うべきものである。その中で、名詞述語文・形容詞述語文は、もとより主観の明示化を担っており、意見表明の構成に優れるが、文学作品に於ける一連の語りとしては多用されにくい。その意味に於いて、動詞述語文の占める役割には大きいものがある。即ち、万葉集の「は」構文に於ける動詞述語文の多用は、個々の和歌の表現性の問題を超えて、歌集全体が一つの文学作品としての表現類型を明確に示しているということでもあるだろう。

〔注〕

1 小路一光（一九八八）によれば、「の」が四七八九例（枕詞を除く）、「に」が三四七一例で、「は」は一七八七例である。

2 例えば、次例がある。

○日並皇子の命の馬並めて御獵立たしし時は（者）来向かふ

（四九）

○晚蟬は時と鳴けども片恋に手弱女われは（者）時わかず泣く

- 3 仁田義雄(一九九一)の規定に従う。
- 4 萬清行(二〇〇六)は、述語の品詞上の種類を考慮しない形で、「は」構文の文末が係助詞の終止形になるものを挙げていて、それらは、当然、判断文の範疇である。
- 5 尾上圭介(二〇〇六)には「古代語においては主語と述語の間には助詞がいらぬのが基本的な姿であった」(7頁)とある。
- 6 高山道代(二〇〇六)に指摘がある。103頁。
- 7 注3に同じ。
- 8 仁田義雄(一九九一)の指摘。122頁。
- 9 主格表示が無助詞の形式になることは、そこでの格確認が容易であることを意味する。即ち、「が」の表示は、その存在を必要とする要件が生じた構文であることを意味する。例えば、所謂「転位陰題文(転位文)」では、総記の意味が張り付く上で「が」の表示が不可欠である。また、一文の構成・構造が複雑なものほど関係構成の明示が求められ、「が」の表示は必要度が高まる。
- 10 尾上圭介(二〇〇二)では、例文19〜21のような「は」の用法を「事態の強調的承認」と呼び、題目提示とはしない(72頁)。しかし、これが判断文であることは紛れもない。
- 11 半藤英明(二〇〇六)・第十二章に、「は」「が」と形容詞述語文の関連について論じた。

参考文献

- 伊藤 博(一九八三)『萬葉のあゆみ』(塙新書)
- 大野 晋(一九八〇)『日本語の世界1 日本語の成立』(中央公論社)
- (二〇〇六)『語学と文学の間』(岩波現代文庫)・初出は一九六七年の「日本人の思考と日本語」『文学』12月号
- 尾上圭介(二〇〇二)『係助詞の二種』『国語と国文学』第79巻第8号
- (二〇〇六)『存在承認と希求―主語述語発生の原理―』『国語と国文学』第83巻第10号
- 小路一光(一九八八)『萬葉集助詞の研究』(笠間書院)
- 高山道代(二〇〇六)『絶対格的名詞―ゆの展開―』日本語文法学会第7回大会発表予稿集
- 萬 清行(二〇〇六)『終止のコソ』『国語国文』第75巻第5号
- 中西 進(一九七五)『神々と人間』(講談社現代新書)
- 仁田義雄(一九九一)『日本語のモダリティと人称』(ひつじ書房)
- 半藤英明(二〇〇六)『日本語助詞の文法』(新典社)
- 森野 崇(一九八四)『万葉集』における助詞「は」の用法―「主題・とりたて」をめぐる―』『国文学研究』(早稲田大学) 第82号
- (付記) 登尾豊先生がご退任される。先生との語らいで得た最大のものは、語学の人間にも、文学への憧憬を抱き続けることがあってよい、というものである。そんな回想とともに執筆した本稿である。